

火星



平成18年 4月号

七曜抄 (三)

山尾玉藻

杉苗に雪ののりある雛の日

岩陰といふ風音の海胆の針

夫にシヨールあづけて芹を摘みにけり

離るるほどにその色の緋梅かな

菜の花をたどつてゆけば大錨

初蝶にりつぱな空のありにけり

蝶ふいに高のぼりたる雪解川

観音に会ひたくて蝻すすみをり

桜より桜へ夜の歩道橋

花冷の地を這うたる猯の鼻

太白星

柳生千枝子

新年のひかり入れたり戸をひらき
若さ美し成人の娘らたむろして
成人のひとりひとりに添ふひかり
未来てふ輝き見えて新成人
初雀昨夜播きたるパン屑に
初明り孤り覚めゐる白シーツ
新年の寂しさ天の夫を呼ぶ

杉浦典子

藪柑子の雨にはじまる師系かな
椅子の上に天井近し大晦日

ふたつづつ 膝小僧ありお年玉
しやこさぼてん泊らずに子の帰りたる
笹に積み松に雪積む火吹竹
一願の水とぶあたり冬の苔
ゆずの木の切口の濡れ寒の晴

浜口高子

ロープウエーに身を吊られゆく冬の靄
空稲架の日まみれに年詰まりけり
行く年の風に止まりし猫の耳
砂時計の砂の一粒づつ淑気
笹鳴や小さき椅子を畳みたる
どつと去んだりうす甘き切山椒
湯ざめせる壺の椿のみな蕾

火星作品

山尾玉藻選

餅箱で餅箱蓋す雪もよひ
大和郡山 城 孝子

梢より星の降りけり初詣

履物をそろへてをれば梅ひらく

リハビリといふ探梅についで来し

春夕べ庭あるく夫見えてをり

三四本笹竹を折り農始
明石 戸栗末廣

水音をよすがに畑の大枯木

マスクして耳の虚空でありにけり

炉語りに焰の立ちあがる間合ひあり

実南天ふたつころがる冬座敷

佐保川に鳥の遊べる初景色
大和郡山 小池楨女

犬小屋に注連揺れてをりお元日

奈良の香の筆墨おろす初日より

選のあとに

山尾 玉藻

春夕べ庭あるく夫見えてをり

城 孝子

一見平凡で地味そうな作品故、うっかりすると見逃してしまふ句である。「庭あるく夫見えてをり」に、夫に対するほのぼのとした愛情が窺える。作者が孝子さんと知るとなるほどと納得する。健康を回復されたご主人に対する作者のこころの安定が見て取れる。

三四 本笹竹を折り農始

戸栗 末廣

現在、火星で風土作家と言えはますこの人であろう。「三四本笹竹を折り」は「農始」に行う行事の必需品なのであろう。苗代時の水口祭と似たようなものかも知れない。そう考えれば「笹竹」は田の神の依代である。この作家こそその作品と言えるであろう。

日の高さままだつめたくて梅の白

小池 楨女

「日の高さままだつめたくて」は好天の日の午前中である。但し、太陽の高さとか角度は意識しない方がよい。あくまで感性に拠る冷たさである。「梅の白」の「白」も優れた働

きをしている。一字として無駄の無い作品。秀句である。

雑木山冬日に音のありにけり

廣畑 忠明

掲句は冬の日向の句であるが、冬の日影を想像すると解り易い。冬の日影はいかにも寒々しく、時折甲高い鳥の音が聞こえたりする。この句はそれとは対称の景である。「冬日に音」は即ち日向の音であり、特に何の音と限定しなくて良い。作者の心象の音である。

頬被り言葉のいらぬ日なりけり

土屋 酔月

日常眼にしていた「頬被り」もほとんど見かけなくなつた。頬被りの目的は風除けであるが、自然顔を隠すことになる。何故か世間から遠ざかつたような、また遠ざけたような感じがする。「言葉のいらぬ」はそのことである。下五「日なりけり」の断定も俳諧味を増幅している。

塗の蓋少し浮きをり飾海老

山本 耀子

『季語のごちそう』の作家らしい作品である。お節料理は食べ物における日本の美と言つて良い。塗の椀は赤ではなく黒塗りでなければならぬ。少し浮いた蓋の間から「飾海老」の赤が見えるのである。美しい景である。

外堀をかたむかせたる鴛鴦百羽

永嶋みね子

私は未だ見たことが無いので「鴛鴦百羽」とはちよつと嘘っぽい感じもするが、実景であろう。先日テレビに画家上村淳之氏の自宅の庭が映り、その池に非常に沢山の鴛鴦がいた。あの鮮やかな色の鴛鴦が百羽もいれば、その重量感は相当なものである。「外堀をかたむかせたる」も大いに納得できる。

風花や天守に人のゐるらしき

蘭定かず子

どの城でも冬は訪れる人の少ないシーズン、まして天守閣に登る人などはいなのが普通である。作者はその天守閣に人影を見止めたのである。無機質な「天守閣」の人影に作者はふつと懐かしさを憶えたのである。「風花」もまた懐かしい。

日向ぼこ置いてけぼりにされぬたり

米澤 光子

「日向ぼこ」と言うものは、三人は三人の寂しさ、二人は二人の寂しさを覚えるものである。まして今まで居た人が去った後の寂しさは例えようが無い。それまで支えとしてあったものがいきなり無くなつてしまったような、こころの空洞が作者を襲つたのである。

大雪の気配湖北のまつ平ら

元田 千重

十年ばかり前の年の瀬も近い日、琵琶湖の北端、菅浦に泊つたことがある。湖の色は黒く、空恐ろしささえ覚えたものである。この句の「まつ平ら」は黒一面の湖の存在であろう。まさに「大雪の気配」がその湖の色にはあつた。

かはるがはる赤子抱かるる年賀かな

大西よしこ

この句の「赤子」はまだ一歳に満たなく、愛想の良い可愛らしい子であろう。普通「年賀」といえば固い常套的な挨拶で済ませるものである。「かはるがはる赤子抱かるる」は抱かすにはおれない自然な行為であり、なんとも微笑ましくて良い。「年賀かな」の座りも良い。

鯰起し氷見の一湾気色立つ

矢戸 照子

「鯰起し」は寒雷の一種である。暖かい都会地では寒雷を聞くことは少ないが、雪深い日本海沿いでは多いようだ。富山県氷見は日本一の寒鯰の産地。寒雷と言えど「鯰起し」はこの地にとつてめでたい先触れである。「気色立つ」の措辞が素晴らしい。一句がこの言葉に集約されている。秀句である。(以下略)

恒星圈

田中みゐる

介護士の紫煙の彼方初茜
病床が母のふところ年迎ふ
蓬髪を搔き上げにけり初鏡
外泊の許可を得し夜のおじやかな
松明けて退院許可に小躍す

高松由利子

土屋酔月

獅子舞のかぶりをとりしピアスかな
みちのくの幼馴染の手毬唄
埋火や順にたどりし来し方を
成人の日磴の袂をもてあます
寒中の手のぬくもりを筒茶碗

風の色になるまで枯れし芒かな
木枯の翳りに変はる湖心かな
耳遠きひとにあひづち冬ぬくし
現し世はちぎり絵のごとぼたん雪
汐の香を立てて焼かるる串浅蜷

田中英子

戸栗末廣

雪達磨つぎつぎに灯の通りけり
荒縄の結び目匂ふ夜の雪
大空へばらばらに翔つ寒雀
冬晴の松本清張記念館
風花の灯れる展示ハウスかな

みのししのみの字のかたちしてゐたり
妻に見えわれには見えず露の薑
どんど焼き見てきし靴に海苔の屑
老いてより夢をはぐくむ浮寝鳥
ひとところ冬草のあり観覧車

獅子座

山尾玉藻推薦

中上照代

初句会友のはぢらひ見てしまふ
おだやかにゆつくり行かむ初明り
かにかくに生きて賀状を書けるとは
寒晴や西に東に歩行器を

小林成子

鉢植の音たてて吸ふ寒の水
信号を渡り切れずに戎笹
十日戎夫の仲間に混じりをり
七味屋の風に反りたる新曆

西畑敦子

雪の上に消防ホース伸びゆけり
風花や消火器抱へ僧走る
犬もまた白息吐きて男坂
子供等の声に冬芽のふくらめる

蘭定かず子

春隣龍を鳴かすに手を打つて
門川に落す雪塊冬木の芽
一面の雪の湖国や初電車
ぬばたまの夜を煽れりお山焼

助口弘子

いもぼうに寒の灯素通りす
粉雪の三年坂を郵便車
男鹿の眼大きく潤む寒日和
お降りや文殊の知恵を授かりに

松山直美

凍りたる葉牡丹畑に日の当たり
とりあへず仏壇に置く朱欒かな
日本海の空の近づく雪起し
波音に応へてゐたる水仙花

永嶋みね子

七十のいまおもしろき初鏡
初夢に卵を産んでしまひけり
二日はやフランスパンとマグカップ
鏡割夫を当てにはしてをらず